別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者　　南　映子

本論文は、20 世紀前半メキシコにおけるシュルレアリスムの受容に深く関わった詩人ハビエル・ビジャウルティア（1903-1950）の創作の軌跡を明らかにするものである。生涯に発表した５つの詩集からそれぞれいくつかの詩を選び、背景となる文化的・社会的コンテクストを参照しながら、着想の源を先行テクストのなかから探り当て、それらがどのように作品のなかで結実していったかを検討し、個々の作品の新たな読解を提示すると同時に、詩人としての全体像を描きだした論文である。

ビジャウルティアは、創作において影響を受けることを怖れない詩人であった。ある書き手がほかの書き手から影響を受けるのは、両者の間にもとから何らかの類似性が存在するからで、影響を受けることによってむしろ自らの潜在的特性を顕在させることができると考え、詩作の着想の源となるモデルを進んで探した。異なる時代や地域の作品や考えのあいだに類似性や一致を見出し（これを本論文では《響きの一致》と呼ぶ)、自らに照らし合わせるというプロセスを繰り返すことによって、作品を作り上げたのである。本論文ではこの創作態度に着目し、このメキシコ詩人が入手しえた可能性のある詩、絵画、戯曲、批評文、あるいは友人たちと交わした手紙を綿密に検討し、詩人とその着想源との《響き合い》の軌跡を描いた、野心的な論文である。

《響き合い》を起こしたモデルのなかで、とくに重要となるのが、ヨーロッパからもたらされたシュルレアリスム、フロイト理論、スペインバロック詩である。ビジャウルティアにおけるこれらの影響に言及した研究は多数あるが、詩中のモチーフやイメージ、言語的特徴について、影響があるとたんに指摘するにとどまり、その発見を各詩の理解を深めることにつなげたものはほとんどない。またアンドレ・ブルトンと同時代に生きたこの詩人が、長い活動時期をもつブルトンの運動をそれぞれの時点でどのように受け止めたかを探る研究も従来なされていなかった。先行研究におけるこのような問題点を踏まえた上で、ビジャウルティアの創作活動を５つの時期にわけ、各時期においてシュルレアリスム、スペインバロック詩が詩人の作品に起こした《響き合い》を詳しく検証している。

本論文はスペイン語で書かれている。序論、結論および５章から構成され、本文、図版、参考文献表、略語表を含め、344 頁となる。

第一章では、第一詩集『反射像』(1926）から、この詩集を特徴づける鏡のモチーフを含む四篇「反射像」、「村」、「無色」、「街路」を取り上げた。それぞれ、クロード・モネの印

象派絵画、ピカソのキュビズム絵画およびディエゴ・リベラの壁画、セザンヌの絵画、同時代メキシコで革命芸術を標榜していたエストリデンテスモの詩との《響き合い》がどのように起こっているかを検討した。この詩集にはまだシュルレアリスム、バロック詩いずれの影響も見られないが、近代詩人としてのあり方を模索した痕跡を読み取ることができる。言葉をそぎ落とす《純粋詩》、オルテガ=イ=ガセットのいう《非人間化》した芸術、その中で生の痕跡をどう救い出すか、芸術家の政治活動への関与、といった問題に直面し苦悩する詩人の姿をあぶり出した。

第二章では、「詩〔Poesía〕」（1927）と「彫像の夜想詩」（1928）の２つの詩を扱った。最初の詩は、夢想状態で生まれる言葉を書き取り、詩と対話する詩人について描いているものだが、この詩においてシュルレアリスムの自動記述とフロイトの理論が初めてはっきりした形で見られるようになる。ミメーシスではない手法で人間の《生》の問題に取り組むにはどうすればよいか、という点にビジャウルティアがひとつの解決を見いだしたことを明らかにした。また２つめの詩では、ジュール・シュペルヴィエルの詩、デ・キリコの絵画、ジャン・コクトーの戯曲が響き合っていることを検証した。

第三章では、「何も聞こえない夜想詩」（1929）、「愛の夜想詩」（1930）、「バラの夜想詩」（1937）のを分析した。この時期、スペインにおいてバロック詩再評価の大きな動きがあり、それに呼応するものとして、これら３つの詩では、シュルレアリスムのほかにスペインバロック詩からの影響が指摘された。一つ目の詩はソル・フアナの『第一の夢』、二つ目はフランシスコ・デ・ケベードのソネット、三つ目はルイス・デ・ゴンゴラとソル・フアナの詩を発想源としていることを明らかにした。

第四章では、「Amor condusse noi ad una morte」（1939、1941）を論じた。ダンテの『神曲』地獄篇のエピソード、ジェラール・ド・ネルヴァル、そしてブルトンとの響き合いがあることを検証し、またスペイン共和国派の亡命知識人たちやパブロ・ネルーダのプロパガンダ的な芸術への反発をこの詩の中に読み取った。

第五章では、「春への賛歌」（1948）を扱った。この詩は第二次世界大戦末期から戦後にかけての文学をめぐる状況を踏まえて書かれ、詩の再生への願いと詩の力に対する信念を表明していることを指摘した。異端審問に屈することなく自らの知的好奇心に忠実であったソル・フアナ、ナチス占領下の言論統制にさまざまな手段で抵抗したフランスの文学者たち、そして戦後のアンガージュマン文学の流行に異を唱え、詩を擁護したブルトンへの響き合いを指摘した。

これらの検討を通じて、ビジャウルティアのシュルレアリスムおよびバロック詩との関

わりが従来考えられてきたよりも複雑で豊かなものであること、また彼が生涯を通じて「詩には何ができるのか」と問い続けたことを明らかにした。

以上が本論文の概要である。本論文の主たる功績は以下の点にまとめられる。

特筆すべきことは、決して読みやすいものとはいえないこのメキシコ詩人の詩の一字一句にこだわった、繊細で豊かな作品分析が行われていることである。先行テクストが織りなす網の目の中にビジャウルティアのテクストを置いて読み直す、という方針から、詩人に影響を与えたであろうメキシコとヨーロッパの古今の文学作品や絵画を幅広く探り、手紙や当時の雑誌なども丹念に読み込み、先行研究では気づかれなかったテクスト同士の結びつきを発見し、それぞれの詩において、従来の解釈の変更に迫る新たな読みを提示した。また先行テクストとの響き合いを明らかにすることで、取り上げた個々の詩がより深く、より豊かに読めることを示し、詩を読む喜びを論文を通して伝えることに成功している。この論文が明晰な見事なスペイン語で書かれていることは強調しておかなければならない。

20 世紀前半のひとりのメキシコ詩人の作品を扱いながら、メキシコ国内での政治と芸術をめぐる論争、ヨーロッパの文芸思潮、とくにシュルレアリスム、フロイト理論、バロック詩の再評価の動きがメキシコに導入され、同化されていくプロセスを当時の雑誌などを使って丹念に分析紹介しているため、詩人を取り巻くメキシコの文学状況が鮮やかに示され、視野の広がりのある論文となっていることも、審査員全員から高く評価された。

他方、審査では次のような問題点が指摘された。本論文の研究方法という点からみると、先行テクスト研究に位置づけることができるが、先行テクストから受けた影響やインスピレーションというのではなく、《響き合い(resonancia)》、《響きの一致(consonancia)》という独自の分析概念を使ったところは斬新であると評価できる。これによって、着想源としての先行テクストとの関係をより立体的に示し、詩の制作過程により踏みこんだ解釈を提示し得た。これは方法論としては面白いが、一方で、リスクの多いやり方でもある。先行テクストと響き合う詩作プロセスを、さまざまな証拠を挙げて推測する論述が、いつもうまくいっているというわけではなく、説得力の欠ける論証となっているところが何カ所かあった。とはいえ、説得力をもたせようと、証拠の数を増やし、論理性を追求すると、詩作という行為がもつ危うさが見えなくなってしまいかねず、本論文の方法論は斬新ではあるものの、諸刃の剣だという指摘もされた。また最後の五章の女神イシスについての議論はもう少し踏みこんだ分析が必要であるという意見があった。用語の点では、《響きの一致》という概念を表すのに、ファイナル・コロキアムで提出された論文で使われていた sintonía という言葉の方が、本論文で使われている consonancia よりも適切であるという指摘がなされた。

しかしこれらはいずれも、本論文の全体としての質の高さを本質的に損なうものではない。スペイン語で書かれた本論文が、この領域の研究において大いなる貢献を果たしたことは間違いない。以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）を授与するにふさわしいものと認定した。